

ESSAY

成年後見制度を活用した障がいの ある方のサポートについて

大 場 正 昭
(昭和46年修士入学)



成年後見制度は、判断能力の不十分な成年者の契約行為や、財産管理等を行うことにより本人を保護する制度です。この成年後見制度は、民法の禁治産制度が改正されて、平成12年（2000年）に施行されました。本人（被後見人）の判断能力により後見、保佐、補助に分類されます。後見開始申立書は、本人の住民票がある地域を所轄する家庭裁判所に提出します。調査官が本人及び後見人候補者を面接調査して、家庭裁判所の裁判官が後見人を任命します。調査官はNHK朝ドラ「虎に翼」の調査官と同じ役割ですが、少年事件でなく家事事件（遺産相続、後見、夫婦関係等）を扱います。

私は、東京工芸大学を定年退職する数年前から、妻から「あなたは大好きな建築に50年近くかかわってきたので、第二の人生は、次男（自閉症）のために過ごしてほしい」と説得されて、退職後の仕事として成年後見を選択しました。次男は話すことも書くこともできない最重度の障がい者ですが、笑顔で家族を和ませてくれます。自分が66歳のときに、横浜家庭裁判所に後見開始申立書を申請して、調査官の面接を受けて、次男の成年後見人になりました。多くが弁護士、司法書士等が扱う個人後見のなかで、私の場合は、親族後見に該当します。成年後見には、後見基準日（受任した月）の財産残高等の成年後見事務報告書を横浜家庭裁判所へ報告する義務が生じます。私の場合は、報告書に



図1 親族後見の被後見人（自閉症の次男）の車内での様子

次男の写真（図1）を添付することで、文字情報だけでは伝えづらい本人の様子を裁判官へ報告しています。

ただ、過去に驚愕したことが一度あります。後見報告書で、成年後見人（父親）は、財産管理は今までどおりに行うと記載したところ、次男の現預金すべてが、裁判所が監督する「後見信託銀行」へ預け入れさせられました。原因は、祖母や親の贈与で預金が裁判所の定める基準の限度額を超過したためです。裁判所は、性悪説の立場から、成年後見人である父親の口座管理を信用せずに、次男の財産を管理するのです。

個人後見以外に法人が行う法人後見があります。勤務した「NPO法人成年後見センター かけはし（以降、かけはし）」は法人後見に当たります。代表者は小川肇氏で、少林寺拳法8段の有段者です。かけはしの設立にかかわり、副代表理事として8年間務めました。図2にか



図2 法人後見の「NPO法人成年後見センター かけはし」のロゴマーク

けはしのロゴマークを示します。後見対象は知的障がい者で、身上監護と財産管理を担当します。身上監護は、定期的な「被後見人をサポートするネットワークの構築と維持管理』が対象です。

かけはしでの後見業務のなかで、私にとって印象深い被保佐人はIさんです。たどたどしい会話ですが、ご本人の意思をはっきり相手に伝えることができる方でした。「自分は健常な人と同等に扱われたい」との強い意志をお持ちで、選挙の投票は必ず車椅子で近くの投票所まで行っていました。未投票は皆無です。障がいは、言葉・運動を掌る脳の前頭葉に機能障害があるだけで、他の部位は正常で、抜群の記憶力を持つ方でした。付随業務として、ご両親が後期高齢者だったので、ご両親の要望に沿った対応を心がけ、Iさんの年齢に近い弁護士や税理士等を紹介しました。最初の1年間は毎週通って、コミュニケーションを重ねて、イラスト等を作成して、意思伝達の透明化に努めました。

横浜国立大学大学院等の経験に基づく工学分野の視座と、障がい福祉分野の視座の二つの視点を持つことにより、幅広く後見活動に取り組めたと考えています。

その後私は、幅広い障がいのある方の支援活動をしたく、3年前にNPO法人を設立して、現在は、講演会企画や障がい者支援の活動をしています。ホームページのアドレスは、次のとおりです。

<https://www.nijinokai-sasaeai.com/>

ご高覧いただければ、幸いです。

(NPO法人障がい者福祉の虹の会 代表理事)

水煙会



会報 54 号

横浜国立大学建築学教室同窓会